

キトラ古墳の調査（飛鳥藤原第 135 次調査）

四神・十二支と日月・天文に彩られたキトラ古墳の石室は、盗掘孔から流れ込んだ土砂で埋まっていました。これを発掘して棺の型式や副葬品などの遺存状況を確認する調査を、6月から7月にかけておこないました。今にも落下しそうな壁面に注意しながらの調査ではおぼつかないので、壁と天井を保護するステンレス製の枠（通称：鳥かご）を石室内に組み立て、その中で作業をおこないました。檀原考古学研究所および明日香村との共同調査です。

盗掘孔からの流入土は南で分厚く堆積していましたが、その下に厚さ5cmほどの漆片の堆積層が石室全面に広がっていました。漆塗り木棺が盗掘で砕け、水没と乾燥を繰り返した堆積層です。

壁画の処置が急がれたこともあり、堆積層表面でみえた遺物は取り上げましたが、それ以外は漆片を掘り下げることなく、漆堆積層を20×25cmのブロックに切り分けコンテナに入れて石室外に出しました。

現場で確認できた出土品には、琥珀玉、刀装具片、木棺に付属していた金銅製飾金具と銅製釘隠、さらに被葬者の頭蓋骨片と歯、などがあります。鏡はありませんでしたが、その内容は高松塚古墳やマルコ山古墳と共通します。刀装具片は楕円形環状をした鉄製の帯執おびとり金具と推定され、外面に金象嵌があり、内側には銀板を張っているようです。被葬者は性別不明ながら、壮年から老年と推定できました（京都大学片山一道教授による）。

現地の発掘は7月9日に終わり、引き続いて壁画の保存処置と危険箇所の取り外し作業が、東文研と専門技術者によっておこなわれました。発掘で持ち出した石室内の土は、順次コンテナごとX線写真を撮ったのち洗浄を進めています。なにが入っているか、乞うご期待。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 花谷 浩）



金銅製忍冬文環座金具